12

安藤忠雄

Ando

［プロフィール］

1941年	大阪に生まれる
1962–69年	独学で建築を学ぶ
1969年	安藤忠雄建築研究所設立

特集2｜本論

近代建築の成熟を目指して

松葉一清
Kazukiyo Matsuba

司馬遼太郎記念館[写真:松葉一清]

大阪府立近つ飛鳥博物館[写真:松葉一清]

美しく齢を重ねる近代建築

–

厳しい冬が長引き、「桃の節句」に及んでも、早春という言葉は体感しにくかったが、菜の花だけは、目に鮮やかな黄色の花弁を誇らしげに輝かせていた。

東大阪市の「司馬遼太郎記念館」[2001]。今は周囲は住宅地になっているが、いかにも豪農の居宅らしい大きな敷地の日本家屋が、往時の河内の豊かな農村の風景を偲ばせる。

作家・司馬遼太郎は、野趣あふれる農地の風景を好み、庭に面した書斎の前の土管に菜の花を植えて、執筆の合間、目を遊ばせていた。菜の花は、記念館の玄関先から始まり、司馬氏が眺めた書斎に面した庭先に花を咲かせ、来館者を館内に導くガラスの曲面壁の通路にも切り花の花瓶が並び、春を言祝ぐ雰囲気をもたらしていた。いやそこだけにとどまらず、菜の花の植栽は、一帯に広がり、この季節ならではの彩りをまちに添えている。

素晴らしいことだと思う。『坂の上の雲』を始め、多くの歴史物の著作で圧倒的な人気を誇る司馬遼太郎の存在は誰でも知っている。だが、彼が「農地の風趣」を好んだことをここに来て初めて知った。その司馬氏が亡くなった後、彼の愛でた野趣がこの地の春を飾るとは、冥界の司馬氏も期待しなかっただろう。氏を深く理解するひとつの手立てが、記念館の設置をきっかけに公知のものとなったのは好もしいし、同時に建築家・安藤忠雄も存分に存在意義を示したと言えるだろう。

そんな思いを胸に、この記念館の最大の見せ場である大書架の「展示室」に入った。地下と1階に広がる吹抜けの壁面を構成する大書架のすべての棚は、2万冊の書籍で埋められている。書籍は背が一列に並ぶように綿密に計算された奥行きの棚に収められている。精巧な仕立ての木工の書架は、本を満載して緩やかで心地良い曲面を描き、来訪者を書籍の醸し出す「知の威厳」で圧倒する。

この感覚はウィーンの王宮内にあるオーストリア国立図書館での空間体験に、うり二つだった。

マリア・テレジアの父、カール6世が、広く市民の啓蒙のために開設したオーストリア国立図書館は、やはり木製の書架が床から吹抜けの天井までを占め、オーストリアを強大な国家に押し上げた書籍が書架を埋め尽くしていた。バロックの大建築家フィッシャー・フォン・エルラッハによる図書館は、パリの旧国立図書館、ロンドンの大英博物館内の図書館をも圧倒するほどの世界最高の「知の威厳」を空間として表現する。

安藤による司馬遼太郎記念館は、それよりはるかに小さく、蔵書数も300万冊対6万冊で、数字上比較するものではない。しかし、「小よく大を制す」というか、空間がもたらす知への畏敬の表現は、世界のそれらの大図書館にひけを取らぬ水準に到達している。

瞳を凝らすと、書架を構成する木製の棚も方立ても、経年変化による色付きが確かめられる。10年前の竣工時の軽やかさからすると、いかにも木材らしい落ち着いた色の沈潜（ちんせん）である。その色付きと、書籍の背のエージングが、書籍と書棚を一体化させている。それによって、本もまた「壁」となり、建築が刻む「歴史」と歩調を合わせ、永遠の空間装置に昇華しつつある。これは安藤にしか求め得ない「力業」の成果である。

近代建築が経年によって熟成していく。書架の壁を前に、私は「そうあることではないな」と心の中でつぶやいた。建築家は、菜の花の扱いひとつを取っても腰を据えて自作と向き合ってきた。彼の近代建築が好もしく年老いていく光景は、その本気があってこそ出現しているのだと得心した。

建築家として自作に向き合う真摯な姿勢が、書架が建築の躯体と一体化しての「永遠の装置化」も、屋外の「菜の花による環境形成」も、もたらしたのである。その意味では、私たちは、近代建築の限界を突破する理にかない、土地に根差した建築家の挑戦を目の当たりにしているのだ。

–

植物がつなぐ時間のバトン

–

ほんの数時間前の正午頃、安藤と私は「大阪府立近つ飛鳥博物館」[1994]にいた。こちらでは18年にわたって進めているウメの植樹を持続させるために、安藤が講演の演壇に立った。私がここを訪ねるのは、それこそ創設当初以来である。かつては人影もまばらな博物館が、この日は驚くほど多くの来館者で賑わっていた。もちろん、安藤の講演がお目当てなのだが、年間の来館者数が10万人を優に超えていると聞いて驚かされた。古墳が集まる立地ゆえに決して公共交通でのアクセスの便はよくない。大阪府と奈良県の府県境に位置して、南海電車の最寄り駅からバスで20分ほどを要し、さらに徒歩で丘陵を登る。それを押してまで人を魅き付けているのだ。

講演前のひととき、安藤と共に山の斜面に広がる博物館の敷地をゆっくりと歩いた。春の遅い今年、ウメはまだつぼみで開花は確かめられなかったが、小指の先より小さなつぼみは濃い赤に色付いていた。樹木によってはその赤が、葉の落ちた枝全体を覆うかのように染め上げ、冬の寒さを乗り切ってきた生命力を感じさせた。

安藤によると、ウメの木は博物館の敷地内で330本に達するという。1994年の開館時に150本が植えられ、それを18年かけて一般の人たちの寄付を仰ぎながら、こつこつと180本増やしてきた。講演会そのものは無料だが、安藤事務所の所員らが募金箱を持って講演ホールの入り口に立ち、協力を呼び掛ける。安藤自身は机に張り付いて、自著をサインして販売している。印税を植樹の予算に当てるためだ。講演会の参加希望者は、定員の5倍近くにも達し、会場に入りきれない聴衆はホールのホワイエのテレビ画面で安藤の講演に見入った。

講演に先立って敷地内の緑地を歩く安藤に、多くの来訪者がにこやかに挨拶した。その一人ひとりに、愛くるしい笑顔を返す安藤も、心からうれしそうだった。講演の中で、安藤は「建築は時間と共に古びていきます。しかし、その時間の経過をしっかりと傍らから見つめていくのが建築家の仕事なのです」との趣旨の発言をした。私は単なる建前にとどまらず、それを実践しているからこそ、建築は正しく歳を取り、歳月を重ねるごとに、来館者の建築家への信頼が深まり、現在に至ったことを喜ばしく思った。

–

安藤がホワイエでのサインに赴いた後、近つ飛鳥博物館の建築の内外を歩いてみた。斜面を巨大な階段が覆い、その上部には、囲いを段状に切り落とした角柱の塔が聳えている。三々五々、来訪者が階段に集い、腰を下ろして山裾側へと視線を向けている。その視線の先から、古代の墳墓の散在する丘陵地の歴史が、少し春めいた風に吹かれて立ち上ってくるかのように思えた。大階段を置いた選択の正しさが、竣工時よりはるかに明確になったとも感じられた。

安藤は、この博物館の成功を「設置時の担当者の熱意だ」と、聴衆に語り掛けた。その人は日曜日になると、自分の休日を返上して、安藤を建設予定の現地に誘い出し、小さな古墳一つひとつの内部に案内して説明を続けたという。「だから、初めからここはうまくいくという確信がありました。やっぱり、皆さんの熱意が大切なのです」と語り掛けると、観客席の方々でうなずく聴衆の姿が見られた。

その熱意が建築家の創造の魂を動かし、18年に及ぶ歳月、持続させた。熱意の案内を受けた安藤は、きっと今も小さな古墳ひとつひとつの姿を脳裏に焼き付けているに違いない。日本にとって、そして、地域にとっても大切な文化財を、現代の人々に展示し、継承していく責務が、この博物館には求められている。それは完成した時点から始まり、気の遠くなるほど長い時間、果たし続けられなければならない。そう、きっとそれは全うされるのだ。

ウメの木の植樹は、そうした時間感覚を、一年また一年と確認継承していくための大切なバトンなのだと、私は受け止めた。安藤は毎年、この季節、ここに来て演壇に立つ。それは自身に課した使命を全うしていくための自身への再確認なのだと思う。そして、これも素晴らしいことに、近年、この丘陵地帯は、周辺地域でも指折りの観梅の名所に数えられるようになった。

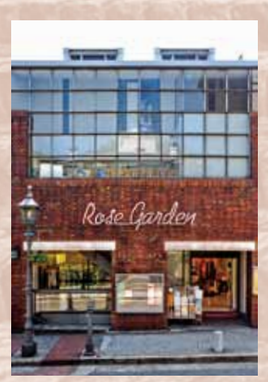
–

市民との協働が文化を紡ぎ出す

–

永遠は一年一年を積み上げることで現実のものとなる。建築は本来、完成すれば千年の命を求められる。そ

サントリーミュージアム「天保山」
[写真提供:安藤忠雄建築研究所]



ローズガーデン[写真:相原功]

TIME'S[写真:相原功]

の原点を、安藤はここでの年々歳々の講演で確認している。外観は、演壇の安藤も認めたように多少なりとも経年の綻びを生じる。しかし、建築家が持続的なサポートを心掛けていけば、綻びは、来館者にも必然的な結果と受け止められ、的確な技術的対応があれば容認されるだろう。古び、くたびれたらいけないのは精神なのだ。ウメの植樹も、また、司馬遼太郎記念館一帯の菜の花も、季節ごとに巡ってきては、人間が陥りがちな怠惰への的確な叱咤激励の役割を担ってくれるのである。

–

安藤は「市民がつくる文化施設」という表現もした。その具体例として「大阪府立狭山池博物館」[2001]の桜の名所づくりを挙げた。奈良時代の行基、重源に由来する歴史的な灌漑池そのものを展示説明する施設だが、博物館の建設以前は、池は無粋な丸坊主の堰堤に囲まれていた。それを完成時にまず1,000本の桜を植樹し、その後、11年かけて市民の手で1,500本にまで増やし、見事な桜のプロムナードに変身させた成功譚である。

植物を介した一連の作品を眺めてみると、新たな安藤像が浮き上がってこよう。生命の持続可能なサイクルをひとつの触媒に、近代建築をコンクリートの廃墟としないための活動を、市民と手を携えて展開している建築家としての安藤の姿である。これらの作品は、行政体の管轄ゾーンが複雑に絡み合い、通常の提案では一体感のある植生を活かしたランドスケープの構成は、とても実現にこぎ着けられなかった。思えば、安藤は、大阪港の「サントリー・ミュージアム「天保山」」[1994]で港湾特有の役所の縄張りをいわば独力で打破して、水辺に向かうコンクリートのオープンデッキなどを実現した苦闘の体験を持つ。それが狭山池博物館では、市民が力を合わせる体制をつくり上げることで、「孤軍奮闘」ではない状況をつくり上げた。

世界のどこに、これだけの支持者を持つ近代建築家が存在しただろうか。私が近つ飛鳥博物館で出会った人々のにこやかな表情は、公的な文化施設を市民自らのものとし、持続させていくことへの確信を共有する者だけが発し得る、心からの笑顔だった。安藤も市民も幸福だ。

–

建築に永遠の命を与える

–

今や彼は孤高の戦士ではない。そして、それが通常の近代建築家の枠を打破した何よりの証明だと私は受け止めている。大阪下町の三軒長屋の一軒をコンクリートで打ち替えた「住吉の長屋」[1976]から、彼の孤軍奮闘は始まった。小さなコンクリートボックスの中央にうがたれた光庭を通って住居に浸潤してくる自然は、少し無理な形だったにせよ、発注主の若夫婦の生活を豊かにした。最初の支持者=援軍がその時現れた。この作品に高い評価を与えた工学院大学の学長を務めた伊藤ていじらである。

私はその直後に神戸北野町の「ローズガーデン」[1977]で、安藤の存在意義を確信した。明治時代に外国人の手掛けた西洋館を訪ねた足でたまたま立ち寄った、小さな商業施設の中庭の空間スケールの心地良さに驚かされた。ついさっきまで見ていた西洋館の歳月が練り上げた親近感を抱かせる空間と、何ら段差なく連続していた。安藤をまだ本町にあった事務所を訪ねたのは、その少し後だったと思う。ただ前後の記憶は定かでなく、ローズガーデンの中庭で、花に囲まれて老齢の外国人が弾いていたアコーディオンの音が耳の奥に焼き付いている。それほどまでに、その日その時刻に立ち合ったローズガーデンの空間は、秀逸を究めていた。

それからしばらくの年月、安藤は、個人住宅(芦屋の「小篠邸」[1981、増築:1984]など)と小さな商業施設(京都の「TIME'S」[I:1985、II:1991]など)で、次々と卓越したアイデアを実現していった。そうした作品が続いた時期の最後の頃、パリ郊外にカイネティック・アートの草分けのひとり、マルタ・パンの自宅(夫のアンドレ・ヴォジャンスキーの設計)を訪ねた私は、緑の斜面に置かれたコンクリートの箱の中で、彼女が熱っぽく安藤の世界における唯一性を語るのを聞いた。ポスト・モダンの潮流の中、ル・コルビュジエの薫陶を受けた世代の創作者にとって、形骸化しない提案を次々と繰り出す安藤は、自身が帰依したモダニズムの救世主とさえ思えたのである。

そうした期待を背景に安藤の次のステージは、4期に及んだ「六甲の集合住宅」[I:1983、II:1993、III:1999、IV:2009]、3つの施設を設計した大阪・茨木の「光の教会」[1989、日曜学校:1999、牧師館:2010]、さらに「地中美術館」[2004]など7つの施設を香川県・直島で手掛けるなど、ひとつの土地に密着したかたちでの作品群に彩られた。

六甲の最初の種がまかれたのは1980年代前半で、2009年まで四半世紀を超えた。光の教会もほぼ同じ期間に及び、直島は1980年代後半から現在まで持続している。

ひとつことを発注主から依頼され、完成まで担うのを請負仕事というが、建築の設計もそのひとつであろう。このような仕事で何よりの名誉は、同じ発注主から再度依頼を受けることだ。

直島では、ベネッセの総帥・福武總一郎と文字通り、二人三脚で作品を手掛けていった。所蔵作品展示のためのギャラリー「ベネッセハウス ミュージアム」[1992]に始まり、その増築棟「ベネッセハウス オーバル」[1995]、地中美術館、木造のホテル「ベネッセハウス ビーチ/パーク」[2006]、「李禹煥美術館」[2010]などひとつ、またひとつと作品は数を増していった。

発注が継続するのは、発注主の側に満足があり、安心があり、小さな島を手を携えて育てていく信頼感が存在するからだ。2010年の瀬戸内国際芸術祭では安藤の作品を中心に、他の建築家、芸術家の創作にも、若い世代を中心に全国から鑑賞者が直島一帯に列をなした。

きっと福武も発注主として本望だろうと思う。自身が白羽の矢を立てた安藤が、直島の地脈を読みきった作品を相次いで手掛け、直島は西日本きっての現代美術の中心地に育っていったのだから。

–

その間、1995年に阪神淡路大震災があり、モクレンやハナミズキなど白い花を植樹する「ひょうごグリーンネットワーク」を個人で創設して成功に導いた。それが東京湾の「海の森」、幕張などの「さくら広場」[2006–]へと展開していった。その体験が、四半世紀を超えるほどの時間感覚の仕事と同時進行的に合体して、冒頭に記したような、単体の建築における生命体としての植物が、無機的な物質体の近代建築に永遠の命を付与する秀作に結実したのである。

–

円熟を拒み、継続する静かな闘い

–

1941年生まれの安藤忠雄は、今年、71歳になる。私は、30代の後半から安藤と彼の作品を見続けてきた。この数ヵ月の間に、3度、彼と話し込む機会があったが、精神的にも肉体的にも、むしろ若返ってきていると感じている。

私個人は、ここまで綴ってきた自然とのかかわりや市民の支持などの文脈を離れて、住吉の長屋に始まる芸術作品を追及する建築家としての営みは、アメリカ中西部の「フォートワース現代美術館」[2002]でひとつの完成の域に到達したと考えている。ルイ・カーンのキンベル美術館と並び立つ立地にあって、歴史的な秀作にひけを取らず、入れ子になった規則的でありながら多様性に富んだ展示室の構成で一頭抜きんでた。安藤の設計の底力は、そのフォートワース現代美術館によって、あますところなく世界に証明できたと考える。建築家・安藤忠雄は、ル・コルビュジエの啓示を受けて、歩み続けた近代建築の枠内での、建築家人生の目標地点への到達に至った。そこまで到達し得た故に、71歳でなお若返る安藤の現在があるのだと思う。市民と触れ合う彼が見せる屈託のない笑顔に接すると、自然体になり得たが故に、持ち前の闘争心が好もしいかたちで高まっているのであり、社会的な文脈で次の大きな爆発も期待できるのではと感じている。

「お医者さんに聞くと人間は肉体的には85歳までは大丈夫」と私にも話し、演壇からも高年の聴衆に話し掛けていた。85歳まで、まだ15年ある。穏健に静かではあっても、円熟には向かうことなく、安藤の闘争はこれからも持続していく。

地中美術館

海の森[図版提供:安藤忠雄建築研究所]

さくら広場[写真:松岡満男]

フォートワース現代美術館[写真:松葉一清]

まつば・かずきよ——建築評論家/1953年生まれ。京都大学建築学科卒業。1976年、朝日新聞社入社。特別編集委員などを経て、2008年–、武蔵野美術大学教授。
主な編著書など:『近代主義を超えて』[鹿島出版会/1983]、『帝都復興せり』[朝日新聞社(朝日文庫)/1997]、『新建築ウォッチング 2003–2004 TOKYO EDGE』[朝日新聞社/2004]、『奇想遺産』[共著、新潮社/2007]、『[復刻]実測・軍艦島』[共著、鹿島出版会/2011]、『復興建築の東京地図』[監修、平凡社/2011]、『「帝都復興史」を読む』[新潮社(新潮選書)/2012]など。
「ムサビのデザイン」展[2011]など、美術展の監修・コーディネートも手掛ける。